

## 「学びの基礎体力」の土台を鍛えよう！ 「勉強」「学習」そして「学び」

「学びの基礎体力」の一つの柱は、学習量、時間の捻出にあることを先回お話ししました。

新しい知識や技能は、学習しなくては身につけません。どんなに賢く、要領のよい人でも、新しい言語を一日で獲得することは不可能でしょう。今までお会いした方の中で、スペイン語を2か月で習得したという外国語習得の達人はいましたが、それにしても、英語の素地があり、密度の濃い学習を集中して行うことができたからです。

さて、学習量、根気強さ、時間の捻出、集中力とは、経験、訓練によって高めることができます。定期考査前、学習に集中できるときに、その訓練を行うことは極めて重要です。もちろん、定期考査前にかかわらず、日ごろからそのような訓練、学習をすることも大切かもしれません。しかしながら、部活動や様々な活動、生活の中で、常に学習に時間を費やすことができるのでしょうか？ そもそも「学習」とは何でしょうか？

みなさんは、「勉強」「学習」「学び」という言葉を知っているでしょう。では、これらの違いをどのようにとらえていますか？

「学び」という言葉が広く使われるようになったのは、それほど昔のことではありません。森敏昭編著『認知心理学者 新しい学びを語る』（北大路書房 2002年）には、次のような記述があります。

21世紀の扉が開かれたいま、学習の概念が変わろうとしています。そのことは最近、とくに教育との関連で学習を論じる際に、「学習」ではなく、「学び」という用語がしばしば用いられることに端的に示されています。  
(森敏昭「21世紀の学びの意味を問う」)

このあと、森氏は、1950年代から2000年くらいまでの学習観を俯瞰しています。最初は、行動主義心理学における学習観、すなわち、「ある条件の下では、人（あるいは動物）はどのように行動するか」を客観的に分析・記述し、それに基づいて行動の予測と分析と制御を行う、刺激と反応の連合が学習であるという学習観でした。次に、問題場面の全体的構造の洞察や理解といった学習者の能動的な認知活動によって成立する認知主義的な学習観へと移行し、さらに人間の認知過程のしくみを解明しようとする認知心理学の発達により、「新しい知識を獲得することによって初心者が熟達者(エキスパート)になる過程」という学習観に変わってくると説明しています。そして、1985年以降は、本来の意味での学習とは、人がなんらかの文化的共同体の実践活動に参加し、新参者から古参者へと成長していく過程であるという社会構成主義、状況学習論を踏まえた学習論が主流となったとしています。これらを俯瞰したうえで、変遷はあるものの、これらに共通しているのは、「知識の獲得」を「学習」としているところであるとしています。そして、たんに過去の遺産を継承するだけでは人類に未来はないとし、「学び」という新たな学習観につなげています。

森氏は、「学び」とは、「知識の創造」につながるものであるとしています。

そして、「真の学び」の条件を3つあげています。

第一の条件は、「それをやるのが楽しいということ」です。楽しくないものは、強いて勉める「勉強」でしかないと言っています。

「楽しくない」「勉強」は、「無能感と無力感」へとつながります。ここには、「知識の創造」はありえません。

では、楽しければいいのでしょうか？

森氏は、第二の条件として、は、「心の成長につながること」の必要性をあげています。「人間の体は食物を食べることによって成長し、人間の心は知識や技能を学ぶことによって成長する」といいます。逆に言えば、「心が成長しない」ものは、真の学びとはいえないということです。

第三の条件としてあげているのは、「自分の将来のために役立つと納得できること」です。ここで大切なのは、「納得」ということです。誰かに言われて、しぶしぶやるのではありません。学ぶことの意味を自ら納得し、自ら主体的に取り組む能動的な学びでなければならないということです。

「学びの基礎体力」の大切な土台となるのは、この3つです。

楽しさ、心の成長、役立つという納得、この3つは、どれが先というものではありません。必要だと納得す

るからがんばってやってみる、そのうち、楽しさがわかってくることもあれば、心が成長するうちに、世界の見え方が変わってきて、何が大切か、自分の納得が変容することもあります。

この3つの土台をしっかりつくるために必要なのは、アンテナを高くし、いろいろなものに目を向けること、自分自身の気持ちや感性を大切にし、その感じ方の意味を問い直すことではないかと思います。

私は、映画が好きですし、本や雑誌、マンガもたくさん読みます。テレビもよく見ます。世の中で話題になったものは、とりあえず触れてみるという風に考えています。面白いもの、楽しいもの、その意味や自分にとっての価値を考えることが、「学ぶ意欲」となります。

例えば、「アルプススタンドのはしの方」という映画を観て、それが高校演劇コンクールのグランプリ作品だと知ると、その脚本を読みたくなり、調べてみます。また、それを例えば15分のショートムービーにするとどうなるか、実際に脚本を書いてみました。その過程で、高校演劇コンクールについて調べ、この演劇が、プロの劇団も上演していることを知り、その演劇もぜひ観てみたいと関心・興味が広がっていきました。

来年度から、3年生が行う全国学力学習状況調査が、C B T（コンピュータ端末によるテスト）で実施されるという報道があれば、文部科学省のホームページを検索し、その検討委員会の資料や議事録に目を通します。そして、受験者すべてが同じ問題ではない、あらかじめ用意された多数の問題から、いくつかが出題されるという方式であることを知ると、それがなぜ公平かという理由を知りたくなり、「項目反応理論」に基づく知ると、『項目反応理論入門』を読み、それが新しい絶対評価のスタンダードになりうるということを知りました。まだ、そこで示される数式の意味は理解できていませんが。

人は刺激を受けることで、新たな興味・関心が生まれ、学びが連鎖し、次々と新しい学び、新しい自分の可能性が開かれていきます。自分が変わると、世界の見え方も変わります。

毎日受けている教科の授業や学校での活動の意味や意義が、よりよい方向に変わることで、「楽しさ」が生まれてきます。逆もまたしかりで、授業を通して、世界の見え方が変わり、新たな関心や楽しみが生まれることもあるでしょう。

考えてみれば、当たり前のことですが、自分にとって価値があると納得して、楽しいことであれば、集中して、時間を忘れて取り組むことができるものです。自分にとって、そんなふうにならなると、関心をもって取り組めるものを増やすこと、「学びの基礎体力」とは、そんな興味・関心、意欲に支えられたものであることが大切なのです。

当校では、本年度より、土曜活用で、大学の先生方や企業の社長さんなど、高等教育機関や実社会で活躍されている方から、興味深い専門的な講義やワークショップをいただける機会を増やしました。また、文化芸術発表会の活動やSDG sの活動など、生徒が中心となって新たな取組に挑戦しています。こうした機会や挑戦に積極的にかかわり、自分の興味・関心、意欲を大いに伸ばしてほしいと思います。

そして、面白いことに出会ったり、新たな気づきや発見があったりしたら、互いに紹介し合えるとよいでしょう。学ぶ意欲や意思をもつ人との出会いは、なにより知的好奇心、学びの意欲を刺激してくれます。そういう学ぶ喜びに満ちた人と人が集う場こそ、「学びの基礎体力」を存分に伸ばしてくれることでしょう。そんな学校でありたいと思っています。